

身近な人とのかかわりの中で

子どもたちの豊かな心の育成をめざす

碧南市立西端幼稚園

1 実践のねらい

本園は碧南市の北部に位置し、周囲は自然が残る静かな住宅地である。いちじく畑や油が淵の花しょうぶ園、応仁寺、無我苑等の名所もある。核家族化が進む中、お年寄りとの「ふれあい農園」での収穫体験や地区の行事に親子で参加するなど地域の諸活動に積極的に参加してきた。今年度は下記のねらいを設定し、より地域に根ざした開かれた園づくりに努めることにした。

- (1) 高齢者をはじめ、自分の生活に関係が深い地域の人々など、いろいろな人に親しみを感じる。
- (2) 身近な人の言葉や話をよく聞き、経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを感じる。
- (3) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で興味や関心をもつ。

2 実践の内容

- (1) **保護者アンケートの実施** ～6月上旬「絆を育む学校づくり推進事業」の委嘱を受けたことを保護者にも知らせ、以下の3つの項目について意識調査を行った。

ア 「絆を育む」とはどのようなことと考えますか？

イ 地域の方々とよい関係を築いていくために、日頃から心がけていることは何ですか？

ウ 住んでいるところ（西端地区）の良さ・自慢できるところは、どのようなところですか？

〈アンケートの回答から〉

保護者の方が日頃から人と人との結びつきを大切にしたり、助け合いや思いやりの気持ちをもったりすることが絆を育むことにつながっていくと考えているのが分かった。心がけていることとしては「あいさつを心がけている」という回答が最も多かった。また「自然が多く残り地域活動が盛んで、年配の方が色々なことを教えてくれる」「田舎だが人が明るく元気なところが気に入っている」という回答が大体を占めた。「子どもたちが健やかに成長していく過程には、地域とのかかわりが欠かせないものである」「ここは住みやすく愛着のある町」という意識が高いことが分かった。また本事業への期待が大きいことも確信したので、活動の目的や意味を園だよりやホームページで随時知らせていくことにした。

- (2) **地区の老人クラブの方々とのふれあい（5歳児）**

ア **玉葱掘りの収穫体験** 〈ふれあい農園 5月〉

「待ってたよ」と笑顔のおじいちゃん。「どうやって抜くのかな」と初めての体験に緊張気味に聞いた子に「こうやってなあ」と優しく応えるおばあちゃん。玉葱が入ったリュックサックを背負って帰る時、「次はさつま芋の苗をさしにおいでね」と見送られ、はにかんで握手をするA児。初めて出会う人たちと一緒に過ごす中お年寄りの温かさに触れ、「また今度くるね」と楽しみが膨らんだひと時だった。

イ **さつま芋の苗さし** 〈6月〉クラブの方と会うのは2回目。

苗を土にさした後、お年寄りと一緒に葉の上に新聞紙をのせた。玉葱掘りでも会ったIさんに「ねえどうして新聞をかぶせるの？」とB児が問う。「みんなも暑い時は帽子をかぶるだろう？苗も暑いから帽子をかぶせるんだよ」と優しい声。帰り際「おじいちゃん、あとはお芋の世話をお願いします」「また水やりに来るからね」と進んで声をかける姿が見られ、苗の成長



ふれあい農園で玉葱掘り

を楽しみにしていることが伝わると共に、お年寄りに親しみを抱き始めているのが分かった。

(3) ひょうたんの栽培 ～ひょうたん名人とのふれあい 7月～11月 5歳児

6月、父親学級で苗を植える。7月上旬、白い花が咲き細いつつも伸び始めた。葉に白い斑点が付いているのを見て「葉っぱが枯れてるよ」とC児。教師の「西端のひょうたん名人Nさんに相談しよう」という声に「えっ名人がいるの？」と期待が膨らんだ子どもたち。その後Nさんに花芽の摘み方や千成ひょうたんの名前の意味やうどんこ病の話等を教えてもらった。「千個成るんだって」「蕾も取るって言ってたよ」等友達に伝える姿が見られた。

数日後「おーい、ひょうたんの調子はどうかね」とNさんの穏やかな声が聞こえると「あ、Nさんだーっ」と駆け寄る男児等。「僕のつるがDちゃんのと絡まってるよ」「小さい虫がいたよ」等と我先にと話しかけていた。9月の収穫日。「昔は、ひょうたんの中身を出して“水筒”や“飾り物”を作った」というNさんの話を興味深く聞く。その後、水に漬かったひょうたんの臭いを面白がったり、種出しの作業に集中して取り組んだりする姿が見られた。「昔の人は大変だったんだね」「あともう少しで空っぽになるよ」「ゆきだるまみたいだね」等、感じたことや気付いたことを思い思いに話しながら、手を動かしていた。



ひょうたんの収穫



なかなか取れないね（種出し）



「乾燥中のひょうたん」

(4) 郷土にまつわる民話の読み聞かせ(5歳児)元小学校長のSさん

「誰だろう？」と少し緊張気味の子どもたちだったが「私と同じ苗字“S”の人は？」の問いかけに「僕も!」「私も、隣の家も!」と賑やかな声。「西端地区は、Sさん一家から始まったんだよ」と聞いた。「猿塚のはなし」「如光坊さん」等の民話を真剣に聴く子どもたち。聞き慣れない難しい内容もあったが「油が淵は昔、海だったんだって、お母さんに教えよう!」等と住んでいる町や郷土に親しみや関心が増していった。



民話の読み聞かせ

3 実践の成果と課題

様々な活動がどのように子どもの心の育ちにかかわっていくのかを、職員間で話し合う機会をもった。環境の構成や教師の援助をどのように実践していくと豊かな心につながっていくのかを具体的に考えながら、進めていった。「ふれあい農園」には今まで、収穫日のみに畑に出向いていた。今年はお年寄りと繰り返し、触れ合う機会を設けていくことで、親しげに名前を呼んだり、自分から話しかけたりする姿が変わっていった。その日限りの活動のみならず、体験を重ねることで、共に過ごす時間が増え、より親しみを感じたり、ほんわかと温かい気持ちを感じたり、感謝の気持ちを抱いたり自分たちが大事にされていることを実感していったようだ。そして「話したくなる」ように心が動いていくとお年寄りとの会話や友達同士のおしゃべりも自然に弾んでいったと考えられる。

ひょうたん栽培では、「おじいちゃん何でも知っている」「すごいね!」とお年寄りに敬いの気持ちを抱いたり、話を聴いたりすることで様々な生きる「知恵」や「技」を学んだ。

実践を通して「子どもたちは体験を通して様々な心情を感じていく」ことを確認できた。継続していくことが重要であると改めて実感した。これからも、地域の方々や保護者、子どもを取り巻く周囲の温かい人的環境の協力を得ながら、子どもたちの豊かな心の育成に努めていきたい。園の現状を発信しながら、地域の方々と一緒に歩いていくと共に、未来を担う子どもたちのために、地域の人々の人間力を結集するきっかけとなるような、園づくりを目指していきたい。